

国家要望等について協議

経営者会議役員会

踏まえた国
への要望事
項について
協議。地域

大阪府農業経営者会議（稲田元正会長）は、5月15日に大阪市内・J Aバンク大阪信連事務センターで役員会を開いた。

会議ではまず、昨年12月12日に開催した大阪府農林水産部幹部職員との意見交換会の内容を

計画実現のために集中して農地を引き受ける中核農家に対する支援策の充実、中高年世代に対する就農支援制度の拡充の2点を要望することとし、必要な支援策について話し合った。

続いて、令和7年度事業について協議。会員からの意見を踏まえ、民間サービスを利用した単発・短時間の人材雇用や、AIの導入について、今後、研修や情報提供などを検討することとした。

この他、会員拡大に向けた取り組みについて協議したほか、近畿農政局大阪府拠点から農福連携推進についての協力依頼があった。

お知らせ

大阪府農業会議

第161回通常総会

◇日時 6月17日(火)

午後1時30分

◇場所 大阪市内・KKRホテル大阪

◇議案

令和6年度事業報告及び収支

決算承認の件、理事補充選任の件

※総会終了後、農委日よりコンクール・全国農業新聞表彰状授与式を実施いたします。



5年前に新設された摂南大学農学部に着任し、地元の京都府八幡市など、これまで触れる機会が無かった関西の農業と関わるようになった。現在は主に野菜の生産、販売に関する調査を進めている。

住居を定めたのは奈良市で、自宅周辺には田畑が散在し、生産緑地の札が立つ。マンション4階の自室から農作業の進み具合を観察する毎日だが、その印象に基づいて、大阪府農業でも重要な課題になっている「農空間の保全」について思うところを書いてみたい。

かつての都市農業は、転用圧力のなかでいかに農地と農業を守るかが課題になっていった。今も消えたわけではないが、その圧力は弱まり、農業は都市に必要な要素として位置付けられるようになった。

新たな観点から都市農業を再定義したのが2015年の都市

光景で、農家が所有・管理する部分がかなり残っている。私が注目するのは貸農園で、さほど多くはない区画に分けられた小農園が点在し、全体では農地の一定割合を占めている。当然のことながら貸農園の利



摂南大学客員教授

北海道大学名誉教授 柳村 俊介

都市農業のマネジメント

その主役は農家だ

農業振興基本法であることは改めて言うまでもない。

用状況はまちまちだ。利用者はめいめい好きな作物を選んで栽培。技術や熱意の差を反映して作物の出来も各様で、立派な野菜が育つとなりに可哀想な状態の何かがある。周年栽培の畑と裸地も同居している。

自宅の周囲にはマンションが建ち並ぶ区画と戸建て住宅の区画があり、それらには含まれたところに農家住宅と農地・林地がひろがる。どこでも見られる

だが貸農園はそうはいかない。自作が難しくなった農地を、家庭菜園をもちたい住民に貸し付けることは、都市農業の多様な機能の発揮につながるが、地域

農園単位で見ると、パラソルやベンチ、はてはBBQセットやドッグランを備えたレジャー農園も出現し、貸農園ビジネスを多角化する動きがあるようだ。ゴージャスな設備の一方、格納庫がある農園は少なく、道具や資材は、利用者が小さな収納棚を設置するか、さもなくば放置されたままだ。

農家が自作する農地と比べると違いは歴然としていて、屋敷や農地の片隅に農機具庫・倉庫をもつ自営農業は周囲に融け込んでいる。やはり長年の歴史が地域と調和した農業をつくりあげているのであろう。

だが貸農園はそうはいかない。自作が難しくなった農地を、家庭菜園をもちたい住民に貸し付けることは、都市農業の多様な機能の発揮につながるが、地域

◇筆者の紹介(やなぎむら しゅんすけ)

1955年神戸市生まれ。北海道大学農学部卒業。同大学院を経て日本学術振興会奨励研究員・特別研究員、コーネル大学農業・生命科学部(米国)の客員准教授、酪農学園大学酪農学部、宮城大学食産学部、北海道大学大学院農学研究の教授、摂南大学農学部の特任教授を経て、現在、摂南大学客員教授、北海道大学名誉教授。専門分野は農業経済学で、農業経営の継承問題等の研究に従事。